

元南機関員と戦後ビルマの関わり —1950年代を中心に—

武島 良成

Relationship between Former Minami-Kikan Members and Postwar Burma: Focusing on the 1950s

Yoshinari TAKESHIMA

Accepted June 19, 2024

抄録：元南機関員が、戦後もビルマの30人志士—特にネーウィンとの関係を保ったことが知られている。そのことは、南機関がビルマ人に感謝されているという言説とも繋がりを持っている。だが実のところ、元南機関員も30人志士も一枚岩ではなく、各人の関係は複雑だった。例えば、日立オーバーシーズの社員になった杉井満と高橋八郎は、志士のボウ・レッヤーと緊密な関係を築いた。しかしネーウィンの介入もあり同社は解散させられた。以後の高橋は、ネーウィンの「客」「友人」としてビルマにとどまった。また奥田重元は、閥閥を見込まれて賠償使節団渉外官に起用され重用された。一方、元機関長の鈴木敬司はレッヤーやネーウィンと再会したものの、ビルマと深い関係を築くことはできなかった。

索引語：南機関、30人志士、ボウ・レッヤー、ビルマ賠償、黄変米

Abstract: Former members of Minami-kan maintained relationships with the Burmese Thirty Comrades, particularly Ne Win after the War. It related to the narrative that Minami-kan is appreciated by Burmese. However, in reality, neither group was monolithic, and their relationships were complex. For instance, Sugii Mitsuru and Takahashi Hachiro, who became Hitachi Overseas employees, developed a close relationship with Comrade Bo Let Ya. However, due to Ne Win's intervention, the company was dissolved, and Takahashi remained in Burma as Ne Win's guest or friend. Okuda Shigemoto, appointed to the reparation mission, held an important role due to his political connections. Conversely, former leader Suzuki Keiji, reuniting with Let Ya and Ne Win, was unable to build a deep relationship with Burma.

Key Words: Minami-kan, Thirty Comrades, Bo Let Ya, Burma Reparations, yellowed rice

1. はじめに

日本軍の対ビルマ謀略機関だった南機関について、一般向けのものから学術的なものまで、多くの論稿・文章が発表されてきた。同機関がビルマの独立をどのように考えていたのかという問題は、日本軍に解放戦争を志した集団があったか否かという重要な話に関わるものであり、言及されることが多いのは当然である。筆者はこの件につき、機関長の鈴木敬司（当時、大佐）が思い描いた「独立」が、日本の影響下でのものに過ぎなかったことを指摘した。これに対して元外交官で麗澤大学教授などを務めた阿曾村邦昭が批判をしたが¹⁾、氏の話は、南方軍高級参謀だった石井秋穂の回想記の、南機関員と30人志士（アウンサンら独立運動の志士たち）が1942年初頭にひとまとまりになっていたという記事を根拠に、同機関にとって不利な材料を全て封じ、民族自決型の独立を目指していたとまで言うものである。だが、石井の日誌の原文にはそのような記事はないし、話が飛躍している。阿曾村が、南機関を批判する多くのビルマ人の論稿や資料を無視しているのも問題である²⁾。

阿曾村のような歴史観が再生産される背景には、元南機関員の一部が、戦後も30人志士のネーウィン将軍（大統領）と交流した事実がある。ネーウィンは1981年に、7人の元南機関員（故鈴木機関長については夫人）に国家勲章を授けており、そのことを根拠に南機関が感謝されていたとする向きもある³⁾。だが、ビルマ国軍を率いるネーウィンにとって、南機関を全否定すると、同機関の工作で生み出された同軍の正統性に傷が付くので、同機関を称揚するのは自然なことである。それに、この時の授章は、ウー・ヌ、ウー・バスエ、ボウフムー・ヤンナインのようにネーウィン政権と対立した者にも広くなされており、「手打ち」や「包摂」の意味もあった⁴⁾。のみならず、元南機関員の高橋八郎は、受章は氏がネーウィンに、BIAに加わった「証明書」をねだった結果だと述べている⁵⁾。そうであれば、元南機関員への授章は、必ずしもネーウィンの自発的意志によるものではなかったことになる。結局、元南機関員とネーウィンら30人志士の関係を理解するには、授章で全てを語るのではなく、彼らの関係を可能な限り丁寧に追跡して分析するべきなのである。

その際、元南機関員も30人志士も、一枚岩ではなかったことに留意する必要がある。筆者が得た友田光男（元東亜青年連盟の顧問格、連盟のメンバーの多くはウー・ヌ政府の閣僚になった）の分析メモには、元機関員の杉井満が、志士のボウ・レジャーと密着していたことが記されている⁶⁾。レジャーはネーウィンの政敵であり、1963年にはネーウィンに逮捕された。他方、元機関員の方でも、奥田重元は自由党の池田勇人の親族（奥田の妻は池田の姪）になり、正力松太郎・川島正次郎・石橋湛山らの助力を必要とした鈴木にとって、潜在的な「敵」になった。しかも、奥田は日本ビルマ協会が主催する行事に出席したが、鈴木は別途、同協会と対立する日本緬甸協会をつくっていた（後述）。このように、元機関員・30人志士の間には、複雑な人間関係があった。それらを拾い上げて吟味することで、戦後の関係、さらには彼らの戦時期への思いを総合的に捉えられるはずである。

先行研究では、このような視点で戦後の元機関員を検討したものは見当たらない。1950年代のビルマ国軍に関する、マウンマウン、キャラハン、中西嘉宏、マウンアウンミョウの研究も⁷⁾、元機関員には触れていない。ウー・ヌ政権を扱ったケイディ、ファーニヴァル、バットウェルの研究書⁸⁾も同様である。これらに対し吉沢公介は、奥田重元の1960年代の活動に注目し、「南

機関の“遺産”ともいえるべき豊富な人脈は、戦後も間違いなく脈打っていた」と言い切っている。だが、鈴木・杉井・高橋・レジャーらに言及しないまま、1960年代の奥田に南機関を代表させて「豊富な人脈」などと言うのは無理である⁹⁾。一方レジャーについては、1948年にネーウィンと対立したことを、キャラハンが指摘している¹⁰⁾。だが、その後の杉井・高橋との提携については等閑視されてきた。

一般書では、遠藤順子『ビルマ独立に命をかけた男たち』が、父の岡田幸三郎が戦後、日立オーバーシーズの社長となったことを記している¹¹⁾。杉井・高橋は、その社員としてビルマで勤務した。本稿では、2の(2)で遠藤の記述を一部踏まえることにする。

以下、2で、第2次世界大戦期の鈴木、杉井、高橋、奥田、泉谷達郎らと、レジャー、ネーウィンらの関わりを、前史としてまとめる。筆者は、南機関とビルマ人志士たちの活動について、タキン党トゥンオウツ＝バセイン派とコウドオ・フマイン派の対立、バモオの関与という新視点を加えて叙述したことがある¹²⁾。本稿ではそれを、各人の活動がわかるように再構成する。次いで3で、戦後の杉井と高橋のビルマとの関わりを述べる。さらに4で、戦後の鈴木と奥田のビルマへの関与について検討する。5では1955～1956年以降の事態の変化に触れる。その上で、6でまとめを行う。

2. 前史：第2次世界大戦期の杉井、高橋、レジャーらの活動

(1) 太平洋戦争前夜

1940年7月頃、参謀本部付の鈴木敬司大佐は、杉井満と共にビルマを訪ねた¹³⁾。杉井は、加藤洋行の社員としてジャワや上海での勤務経験を持ち、この時には塩水港精糖社員の肩書きで入国した。鈴木は、ビルマの民族主義者たちに接触して、いわゆる「援蒋ルート」の遮断や、日本の影響力を拡大する方策を探ろうとしていた。彼の行動は陸軍中央の許可を得たものではなく、資金は塩水港精糖社長の岡田幸三郎らが出していた¹⁴⁾。

この時点で、既に、ラングーン在住の大陸浪人の国分正三元海軍大尉らが、前首相のバモオやタキン党トゥンオウツ＝バセイン派の面々と協議し、1個大隊程度の日本軍を派遣する計画を推進していた。タキン党トゥンオウツ＝バセイン派は、1938年に本体（コウドオ・フマイン派）から分離した少数派である。国分は同派と密着しながら、バモオを介してコウドオ・フマイン派とも関わっていた。鈴木は機密漏洩を恐れて、国分と連絡をとるのを避けた。ビルマの植民地当局は、1940年7月4日に治安対策としてコウドオ・フマイン派のタキン・ヌ（アウンサンの盟友）を逮捕した。さらに、国分らの計画も探知して、8月初旬に国分やバモオを逮捕した。コウドオ・フマイン派の書記長であるアウンサンは指名手配され、8月末に中国の廈門に脱出した。

以上の変動を経て、鈴木・杉井は、バモオに協力する Dr. テインマウンに勧められて、コウドオ・フマイン派との提携を目指すことにした。そして、テインマウンを介して9月頃にボウ・レジャーに面会した。レジャーはラングーン大学の学生ストライキを指導し、1936年にタキン党に入った人物だった。彼は、トゥンオウツ＝バセイン派が分離した後の1938年9月に、アウンサンやヌと共に党本部の委員になった。1939年5月以後は、党のオルグを担当していた¹⁵⁾。レジャーは鈴木・杉井に、アウンサンの写真と廈門での住所を渡した。鈴木は台湾軍に搜索を依頼し、

神田機関がアウンサンを探し出して、東京に連れて来た。鈴木・杉井は、1940年12月に東京でアウンサンらと合流した。鈴木はアウンサンに諮り、タキン党員を脱出させて軍事訓練を施すことにした。

日本の大本営は、鈴木計画を作戰補助に限定して認めた。そして、1941年2月1日に、鈴木を長とする南機関を発足させた。同機関には、泉谷達郎中尉らの中野学校の卒業生が配属された。また、高橋八郎中尉のように、英語・中国語ができるので前線から引き抜かれ、組み込まれた者もいた。他に、杉井のような民間人も、随時軍属として組み入れた。ビルマ工作を正式に承認された鈴木は、早速アウンサンと杉井をビルマに潜入させた。アウンサンは、1941年3月初頭にラングーンで秘密会議を開き、同志たちに日本行を誘った。この会議には、学生運動のリーダーとしてタキン党と共闘していたコウ・チョーニェイン、コウ・バスエも参加し、杉井も遅れて加わった。会議の結果、まずレッヤーら4人が日本に行くことになり、3月10日にアウンサン、杉井と船で日本に向かった¹⁶⁾。これに続く第2回目の脱出者には、トゥンオウツ＝バセイン派のネーウィンらが入っていた。

結局、船での脱出は4回実施され、陸路での脱出者や日本在住者が合流して、ビルマ青年は30人になった（30人志士と呼ばれる）。メンバーの3分の2はタキン党コウドオ・フマイン派であり、3分の1はトゥンオウツ＝バセイン派で、バモオ系は一人もいなかった。鈴木は、青年たちに海南島や台湾で軍事訓練を受けさせた。7月には泉谷を長として、ネーウィンらの精鋭からなる特別班を組織した¹⁷⁾。その間、機関員の一部（高橋、杉井を含む）をタイに送り、ビルマへの潜入を試みさせた。訓練終了後のレッヤーは、杉井と共にビルマに入ろうとしたが、11月21日にタイ警察に逮捕された¹⁸⁾。

(2) 太平洋戦争の勃発

1941年12月8日の対米英開戦後、日本軍はタイを制圧し、南機関員と30人志士は本拠地をバンコクに移した。そして、11日にレッヤーらを釈放させた。鈴木は、タイ在住のビルマ人を集めてビルマ独立義勇軍（BIA）を編成し、南機関員と30人志士を各隊の幹部とした。その際、タイにいた塩水港精糖の社員や、東亜経済調査局附属研究所（大川塾）の卒業生も、多数が南機関に組み込まれた。同塾の第2期生の奥田重元は、タイ大使館に配属されて、英国系学校でタイ語の学習をしていた、奥田ら9人は、鈴木の要請で、1942年1月5日前後に南機関に入った¹⁹⁾。

BIAは、1942年1月初旬に、日本軍（第15軍）と前後してビルマに侵攻した。その際、杉井と奥田は、兵站担当者として近しく行動した²⁰⁾。BIAは反英・反インド人感情を持つ若者を集めて膨れ上がり、3月初旬に第15軍と共にラングーンを占領した。その時にアウンサンとレッヤーは、鈴木がビルマ人に臨時政府をつくらせる約束を反故にした件を詰問した。激論後、部屋から出てきたアウンサンは、奥田に、「小生が心配した通りの状況に進みつつあるように思わんかね」と言ったという²¹⁾。鈴木は、志士たちの不満に顧慮せず、BIAを3隊に分けて、第15軍と共に北進させた。そして5月までにビルマをほぼ占領した。北進の際に、高橋はネーウィン隊の指導官になった。

日本軍はシャン州でバモオの身柄を確保し、8月1日に彼に行政府をつくらせた。タキン党両派には、行政府の部長ポストを2つずつ与えた。BIAについては縮小して、7月付けで正規軍のビルマ国防軍（BDA）に改編した。編制は第15軍の兵備局が担当し、南機関は解散して7人

が指導官として残った。高橋八郎は、ネーウィンの第1大隊の指導官となったが、彼だけが1945年までビルマ人の軍隊に関わり続けた²²⁾。その間、同軍の待遇改善に尽力したり、バモオへの敵意を共有するなどして、ネーウィンとの絆を強めていった²³⁾。一方、鈴木は日本に帰国し、泉谷はビルマで防諜班員・西機関員・樺機関長などの新任務に就いた。奥田はバンコクに戻ってタイ語の新聞の編集に携わり、後に光機関員としてビルマに戻りインパール作戦に参加した。杉井は一旦日本に帰ったが、1943年1月にシャン州政庁付としてビルマに復帰した。シャン州が同年12月にバモオ政府の管轄に移ると、杉井はビルマ国軍顧問部付となった。そして、1944年5月まで、高橋と共同で「南機関外史」の編纂に当たった²⁴⁾。こうして杉井は、高橋の次に30人志士との関りが長い日本人になった。

さて、BDAではアウンサン（席次1位）が司令官となり、アウンタン（2位）が副司令官、レッチャー（3位）が司令部副官、ネーウィン（4位）らが大隊長に就任した。彼らはいずれも30人志士であり、アウンサンとレッチャーがコウドオ・フマイン派、アウンタンとネーウィンがトゥンオウッ＝バセイン派だった。その後、1943年8月に日本はビルマに「独立」を付与し、バモオはアディパティ（国家元首）兼首相となり、タキン・ヌを外相に、チョーニエインを外務次官に起用した。アウンサンは国防相に任命されたが、ビルマ国軍（9月に改称）の主導権をめぐるバモオとの争いが激化した。国防次官になったアウンタンも、自派のタキン・トゥンオウッ、タキン・バセインが閣僚から外されたこともあり、バモオを敵視した。日本軍は、対立を緩和させるために、1944年4月にアウンタンを大使館付武官として東京に移した²⁵⁾。この結果、レッチャーが実質的に国軍の席次2位になった。

(3) 対日蜂起以後

その後、枢軸国の劣勢が明らかになると、アウンサンはタキン党内の共産主義者と共に、抗日地下組織・パサパラ（当初はパタバ）をつくった。ビルマ国軍の中堅幹部たちは必ずしも反日の立場にはなかったが、レッチャーはアウンサンの行動を支持した²⁶⁾。1945年2月半ばに、英印軍が大挙してエヤワディー河を渡ると、ビルマ戦線は崩壊に向かった。パサパラは3月後半に対日蜂起に踏み切り、5月には日本軍はラングーンを放棄した。そして、ビルマ南東部に追い詰められて、8月の終戦を迎えた。国軍の対日蜂起の際、多くの日本人顧問が殺されたが、高橋は例外的に保護された²⁷⁾。

その間アウンサンは、連合国軍と交渉して、パサパラと国軍の立場を認めさせた。彼は1945年末に軍を離れ、「ビルマ人の軍隊」を維持する実務は、レッチャーが担当することになった²⁸⁾。アウンサンが1947年7月に暗殺されると、タキン・ヌがパサパラ副議長から議長に昇格し、英国との外交交渉を続けた。そして、ビルマは1948年1月に英国から独立したのだった。

アウンサンの暗殺後、国防相はレッチャーが継承した。レッチャーは、独立後も英国の軍事顧問団を受け入れるなど、英国と協調的な政策をとった。これに対して、軍司令官のネーウィンらは、国軍から保守系・英国系勢力を排除しようとし、ついには首相となったウー・ヌ（タキン・ヌから改称）にレッチャーの解任を求めた²⁹⁾。共産党だけでなく、戦前に英国軍に加わっていたカレン人の軍隊が蜂起したため、レッチャーは事態を収拾できなくなり、1948年9月に辞任した。その後、国防相は一時的にウー・ヌやネーウィンが担当し、1950年9月以後は、バスエが長期間担当した。

ウー・ヌ政権期には、バスエとチョーニェインがパサパラの副総裁や副首相を務めたが、両者は最大党派であるビルマ社会党の幹部としても絶大な影響力を持った。特にチョーニェインは、産業相なども担当し、ヌをしのぐ力を手に入れたと言われる³⁰⁾。元国防相のレッヤーは、チョーニェインの保護下で政商に転身した。彼の活動については後述する。

以上が、杉井・高橋・奥田・レッヤーらの「前史」である。南機関員と30人志士が関わったのは、全般に短期間であり、両者の繋がりを過大視することはできない。だが、その中で、高橋と杉井は比較的関わった時間が長かったことがわかる。また、レッヤーと杉井の関わりが相対的に深かったこともわかる。これらが戦後の話の前提となる。

3. 杉井満と高橋八郎の戦後の活動

(1) 杉井満の活動再開

敗戦から5年、日本政府はアメリカの許可を得て、ビルマ政府に在外事務所の設置許可を求めた(1950年)。ウー・ヌ政府は、通商代表の常駐のみを許すと答えた³¹⁾。日本政府はこれに応じて、翌1951年11月に在外事務所をラングーンに置いた。こうして、日緬は外交関係の樹立に向けて動き始めた。このような中、ビルマ政府は1950年に、日立造船に工業開発指導を打診した。同社はこれに対して、同年12月から1951年4月まで、事情調査と販路開拓を目的に、常務取締役の増田俊、陸機課長の杉浦信一をビルマに派遣した。その際、ビルマ事情をよく知る杉井満が嘱託として同行した。一行は、ビルマの各地を視察し、「官民要路」の者と懇談した³²⁾。杉井を日立造船に紹介したのは、塩水港精糖の元社長・岡田幸三郎だった。日立造船の幹部たちは、岡田の長崎高等商業の後輩であり、彼の紹介で同行させることにしたのだった³³⁾。また、ビルマへの入国について、高橋は、杉井が船員に「変身」したというドラマ仕立ての説明をしている³⁴⁾。だが、船員扱いだったのは、1社あたり2人という入国制限によるものであり³⁵⁾、身分を隠す意味ではなかった。

さて、ネーウィン司令官によると、杉井はネーウィンが戦争中に日本軍の振る舞いを厳しく批判したので彼を恐れており、連絡をとってこなかったという。ネーウィンは、杉井がビルマに来ていることを知り、彼が帰国する日に船の出航を伸ばさせて再会したと述べている³⁶⁾。杉井が連絡をとらなかったのは、ネーウィンに会う必要がなかったからでもあったろう。日立造船の幹部たちと杉井は、チョーニェインや、実業家になっていたレッヤーには会った可能性が高いが、軍司令官のネーウィンに会う必要はなかった。

そのネーウィンは、戦後の日本が「完全に生れ変わった」と考えていたという³⁷⁾。ネーウィンの日本への思いは複雑だったが、戦前を全否定していたわけではなく、日本人の国に奉仕する姿について高く評価していた³⁸⁾。そして、杉井とも旧交を温めたようである。杉井は、1956年の『週刊読売』に、日本軍の行動を批判・反省する記事を載せ、日本が与えた「独立」については、「形式的な独立」だったと書いている³⁹⁾。こうした認識を持つのなら、ネーウィンと付き合うことは可能だった。ネーウィンは杉井に、高橋八郎をビルマに招待する手紙を渡した。高橋の話は後述する。

この間、日立造船の増田と杉浦は、650トンの小型船10隻の受注に成功していた。同社は、

1951年10月までに10隻を竣工させた⁴⁰⁾。同社は同年11月に、ビルマへの輸出事業を担わせるために日立オーバーシーズという子会社をつくった。オーバーシーズの最初の任務は、10隻の小型船の輸出だったことになる。同社の資本金は1000万円で、全額日立造船が出資した。社長には岡田幸三郎が就任し、3人の取締役のうち2人は日立造船の役員が担当した。もう一人は杉井である⁴¹⁾。

外交的には、この時期に日本の外務省がビルマ政府に、ラングーン事務所の大使館昇格を打診していた(1952年4月)。ビルマ政府は時期尚早として応じなかったが、4月30日付けで戦争状態終結を宣言し、8月には領事館設置を認めるなど、関係は正常化に向かっていた⁴²⁾。この年、レッヤーとタキン・テッティン(ビルマ商工会議所会頭)も日本を訪問し、吉田茂内閣の「政府筋」と会談したというが⁴³⁾、ビルマ側も通商を増進したかったのである。

そのため、日立オーバーシーズの事業もスムーズに進んだ。『日立造船株式会社 七十五年史』は、オーバーシーズが船舶・車両・産業機械などの引き合いに応じ、日立製作所、日本鉱業などの協力で顧問技術者をも派遣したと記している。さらに、機械部品、原材料、食料品その他雑品の輸出にも「相当の実績」をあげたとしている⁴⁴⁾。実際、例えば1952年6月の『日立評論』は、ビルマから発注されたクレーン車の写真を載せている⁴⁵⁾。また別の号は、1953年9月にビルマ政府と材木運搬貨車50両の契約が成立し、1954年2月から使用が始まったことを記している⁴⁶⁾。1954年7月の『国勢総覧』は、日立オーバーシーズの年商が10億円だと記しているが⁴⁷⁾、日本のビルマへの輸出総額は、1953年には3252万ドル(約117億円)だった⁴⁸⁾。つまり、ビルマ輸出の約1割が同社のものだったことになる。同社は一躍「花形」企業になったわけである。

(2) 高橋八郎の合流

さて、高橋八郎である。高橋は戦後、インド・ビカネールの収容所に入れられ、1946年に日本に帰国した。そして、農林省関係の役所に就職したが、公職追放を恐れて辞職し、香川県の農機具のメーカーである野田産業に転職した。その後、杉井に誘われて「産業経済を研究」し、日立オーバーシーズに雇用された⁴⁹⁾。高橋は、1936年4月から1937年1月に徴兵されるまで大阪税関に務めたことがあった⁵⁰⁾。彼は、ビルマ事情を知っているだけでなく、中国語・英語もでき、輸出の実務にも携わった経験のある人材だった。オーバーシーズも入社を歓迎したはずである。そして高橋は、ネーウィンの手紙を持って1952年8月に渡緬した⁵¹⁾。

高橋はビルマで、杉井と共同で、日緬合弁での漁業会社の設立に尽力した。当時、水産大手の大洋漁業(旧林兼商店)が、アジアへの進出を目指していた⁵²⁾。同社は、戦時中に兵食用の魚を獲るためにビルマに船を送ったことがあった⁵³⁾。のみならず、戦争末期まで塩干魚事業のために社員を残すなど⁵⁴⁾、ビルマになじみもあった。一方ビルマ政府は、魚と水産加工品について、国産で賄うことを志向していた⁵⁵⁾。杉井は、ビルマ側が水産業の開発を希望していることを、1952年9月に外務省に伝えたが、お互いの要望が噛み合って合弁の話が進んだのである⁵⁶⁾。そして1953年11月に、大洋漁業、日立オーバーシーズ、ボウ・レッヤー社(社長はレッヤー)が共同出資して、マルタバン漁業会社を設立した。同社の設立は11月だが、ビルマを訪ねた稲垣平太郎経済使節団長の説明からすると、8月の時点で事業は始まっていたことになる⁵⁷⁾。同社は、当面、ビルマ国内に食用の魚を供給し、漁獲高が増えれば日本にも輸出する予

定だった。ただ、最初の9か月は赤字だった。そこで、ビルマ政府は、ビルマ国軍の食事に添えるなどして海水魚の普及を促した。その後冷凍施設が整い、1954年夏にようやく黒字を出したという⁵⁸⁾。

さらに日立オーバーシーズは、竹資源を活かして製紙工場を造ろうとするビルマ政府の依頼にも応えようとした。ただ、話が大きすぎるために難航し、ようやく1953年12月14日に東京で製紙各社が協議し、ビルマへの進出を正式に決めるに至った⁵⁹⁾。機械は日立製作所のものを使い、シットウェに工場を建てる予定だった。杉井は、この件もビルマ側との合弁事業にしようとして実地調査に立ち会い、また、プラント輸出を進めようとした⁶⁰⁾。その間1954年に日立造船はピンマナーの砂糖工場の入札に成功した。そして1955年1月に、オーバーシーズを介してプラント輸出を行った。これは当時としては「最大の製造プラント」だった⁶¹⁾。遠藤順子によると、同工場はチョーニェインが自分の故郷に造らせたものだという。設計は元塩水港精糖の豊田龍三が担当し、岡田幸三郎の長男が工場の引き渡しに関わったという⁶²⁾。さらに、ナンマトゥーの工場の建設も、日立造船が受注した⁶³⁾。遠藤は、これも砂糖工場だと書いているが、ボードウィン鉱山に付随する製煉施設の工事だったろう。さらにオーバーシーズは、日立造船所の事業として、ラングーンに造船所をつくるための調査をした。日立造船社長の松原与三松は、1954年8月に直々にラングーンを訪れ、高橋の案内で港湾を視察した⁶⁴⁾。

以上の日立オーバーシーズの活動は、レッヤーというビルマ側のパートナーに支えられていた。レッヤーと杉井の関係は、2で見たように戦前以来のものだった。杉井は、後述する三信建設の舗装工事の時にも、同社の世話をして、レッヤー社と共同入札させた。また、友田光男も、杉井とレッヤーの密着を強調している。他に、1955年1月の『ダイヤモンド』も、「ビルマ要人とよい日立O・S社」という見出しを付けて、レッヤーと杉井が戦前以来交友関係にあると記している⁶⁵⁾。友田はさらに、レッヤーの後ろに、産業相のチョーニェインがいたと記している⁶⁶⁾。実際、『国際投資形態による合弁会社経営実例集・下』は、マルタバン漁業会社がチョーニェインとレッヤーの協力で生まれたように説明している⁶⁷⁾。彼らにバスエを加えた3人は独立運動の盟友であり、特にバスエとレッヤーが緊密だった⁶⁸⁾。レッヤーらを日本に送ることを決めた1941年3月の秘密会議にも、杉井、チョーニェイン、バスエが出席していた⁶⁹⁾。

4. 鈴木敬司と奥田重元の活動

(1) 鈴木敬司のビルマ米の買い付け交渉

高橋の渡緬の翌月（1952年9月）に、鈴木敬司もビルマにやってきた⁷⁰⁾。鈴木は参謀本部で船舶課長を務めるなど船に詳しく、戦後は小樽で海運会社を営もうとした。それに失敗すると、東京で南貿易という商事会社を興した。それもうまくいかず故郷の浜松に移住したが、貿易商の肩書は降ろさなかった⁷¹⁾。その鈴木に、ビルマでの米の買い付け交渉に加わるように吉田茂首相（あるいはその側近）が依頼したのだった。

この時の交渉は、農林相の根本龍太郎によるものが難航したために、吉田が左派社会党外交委員長の勝間田精一に頼んで、ビルマに派遣したものだ⁷²⁾。勝間田は、1952年1月にラングーンで開催されたアジア社会党会議で、ビルマ社会党議長のバスエ、書記長のチョーニェイ

ンらと面識を得ていた。吉田はそのコネクションに期待したのだった。鈴木を同行させたのは、正攻法でうまくいかなかった時の「保険」だった。結局、勝間田はバスケとの交渉に成功し、すぐに買い付けを認めてもらった。勝間田はビルマに約1週間滞在したというので、9月中旬までに交渉は終わったことになる。買い取った米は10・11月にラングーンで船積みされ、日本では1953年初頭から配給された⁷³⁾。

その間鈴木は、バスケだけでなくレジャーとも会った。鈴木によると、この時にレジャーが、米の輸入業務にあたる3商社（日本綿花、東西貿易、第一物産）が、儲けを生み出すために船積みする米の品質を落としていると述べたという。日本政府が3商社に限定していたのは、無用の競争を避けるためだったが⁷⁴⁾、鈴木は外務省に別ルートでの輸入を提案した。だが、外務省は相手にしなかった⁷⁵⁾。また鈴木は、9月下旬にはネーウィンとも会った。その時に、30人志士のうち15人が集合してくれたという⁷⁶⁾。

1953年になると、配給されたビルマ米に、カビの生えた「黄変米」が含まれているとして騒ぎになった。鈴木は2月18日に上京して朝日新聞社の取材に応えた。『朝日新聞・東京版』1953年2月19日・夕刊は、鈴木の写真と、問題が3商社の仕業だとする彼の主張を載せた。同紙は、「臭いビルマ米は買付が原因」「もうけ本位の商社」「ビルマ人さえあきれる」などのセンセーショナルな見出しで鈴木を後押しした。この件は、2月19日の衆議院農林委員会でも取り上げられ、同委員会は、ビルマ政府に検査方法の見直しなどを求めるよう、日本政府に依頼する決議をした⁷⁷⁾。

騒ぎが大きくなる中、鈴木は日緬両政府に「悪質ブローカー」の排除を求めたが、依然相手にされなかった。そこで鈴木は、思想家の安岡正篤を顧問に担いで日本緬甸協会をつくり⁷⁸⁾、安岡が主宰する雑誌で、貿易を独占的に扱う「調整機関」の設置を提案し、「(武島注：様々な)事情が伏在して居る事を知つて居る者は、日本側には私以外に無いのである」として、機関の運営を自分に任せるよう求めた⁷⁹⁾。安岡も鈴木のために、日本の貿易業者を批判する講演をした⁸⁰⁾。一連の運動には一定の効果があり、衆議院農林委員会は翌1954年9月1日に、業者の選定の見直しを含めた決議をするに至った⁸¹⁾。だが、ビルマでは鈴木に協力する気運は高まらず⁸²⁾、運動は尻すぼみに終わった。しかも、鈴木が排撃しようとした各商社・企業は、元ビルマ大使の沢田廉三を会長として、同じ読み方をする日本ビルマ協会を設立（再建）した⁸³⁾。後述するように、元機関員の奥田重元も、同会と国策研究会が共催するウー・ヌの歓迎パーティーに出席した。鈴木は、貿易業界から締め出されたのである。

この後の鈴木は、正力松太郎、あるいは川島正次郎に頼りながら、浜松でのオートレース事業に注力した⁸⁴⁾。その際、1955年にはビルマとのパイプを誇示して、寄付金を集めた形跡がある。その資金を使って、経営危機に陥った日平産業（元大日本兵器）の工場をビルマに移し、日本で義勇兵を募って、ビルマ国軍を指導して共産主義を防ぐというのである⁸⁵⁾。妄想じみた話だが、実のところ鈴木は、集めた金を、浜松市にオートレース事業の委託を迫る元手にするつもりだったと見られる。しかし、市会議長は「ボス排除」の観点から事業を市営とし⁸⁶⁾、鈴木役割を、小型自動車競走会の会長として選手を派遣するものに限定した。その後、八百長騒動、鈴木による市会議長の糾弾、鈴木独裁的運営の告発などがあり、鈴木は1957年に会長職を追われることになった。

その間の1956年6月に、ネーウィンはアメリカからの帰途、3日間日本に立ち寄った。この

時に鈴木はネーウィンと再会した。だが、ネーウィンは鈴木に実利を与えるようなことはせず、10年後の1966年9月まで会うこともなかった⁸⁷⁾。

(2) 賠償使節団渉外官になった奥田重元

ところで、マルタバン漁業会社が実質的に2年目の事業を行った1954年は、ビルマ賠償交渉がまとまった年でもあった。同年8月17日にチャーニエインらの使節団が来日して交渉し、10月11日からラングーンの領事らが追加交渉を行った。その上で11月4日に岡崎勝男外相らがビルマに着き、翌5日に平和条約と賠償・経済協力の協定に調印した(1955年4月16日発効)。これに伴って、ラングーンの領事館は大使館になった。

奥田重元によると、チャーニエインらが来日する前の1954年3月18日に、突然レッヤーからの封書が届き、賠償交渉について「政府要路」の理解をとりつけるよう依頼されたという⁸⁸⁾。奥田は戦後、父が隠棲した京都に戻り、外務省が管轄する終戦連絡事務局・京都事務所に勤め⁸⁹⁾、その後松永安左エ門のアジア経済調査会の事務局に勤務した。そこで1953年に、ビルマ米の売り込みに来た復興相のボウ・ミンガウン(30人志士)と会い、旧交を温めたという⁹⁰⁾。そのことが布石となって、レッヤーが重大案件を依頼してきたのだった。レッヤーが30歳という少壮の奥田にこれだけ重大な依頼をしたのは、奥田が自由党政調会長(1954年7月末から幹事長)の池田勇人の親族になったことを踏まえていたはずである。レッヤーは奥田の閨閥について、杉井らから聞かされていた可能性が高い。奥田は、早速父の従弟の町野武馬を訪ねた。すると町野は、自邸に吉田茂首相を呼んで引き合わせてくれたという。池田の方は、「大物ロビー」が多いと交渉が滞るので、奥田がパイプ役として適任だと言ってくれたという。

レッヤーは7月末(ないしは8月初旬)に来日し、奥田は彼を町田・池田に引き合わせた。8～9月のチャーニエインと岡崎外相の会談の時には、奥田とレッヤーが別室で待機した。最後は、会談の決裂を防ぐため、チャーニエインとレッヤーを池田邸に連れて行き、池田の腹心の宮沢喜一の通訳で話をまとめたという。この件について、友田も、賠償事業の「裏面外交」の担い手が、チャーニエイン系の杉井とレッヤーだったとし、それは「日本の政界財界のよく知る処」だと記している⁹¹⁾。

この後ビルマ政府は、日本企業と賠償金の使用契約をする補佐官として、奥田を賠償使節団渉外官に任命した⁹²⁾。1955年3月23日の「ウ・ヌー閣下訪日歓迎パーティー」(国策研究会と日本ビルマ協会が共催したもの)の、「ビルマ側主賓」のリストに奥田の名があるので、確かにこれ以前に雇われていたことになる⁹³⁾。ビルマ人の団長として東京に赴任したウー・フラアウンはチャーニエイン系で、奥田と親密になったという⁹⁴⁾。その後1956年3月に、賠償使節団事務所には、中野学校出身で元南機関員の泉谷達郎も勤めることになった⁹⁵⁾。

以上のように、1955年頃までの一部の元南機関員の華やかな活動は、特にレッヤーと密着したものだった。奥田については、元南機関員という経歴以上に閨閥がものを言った。半面、鈴木はコネクションを十分に活かせず、日緬関係の主流には食い込めなかった。

5. 状況の変化

(1) 日立オーバーシーズの解散

ところが、賠償協定が発効した 1955 年の初期頃に、杉井や高橋のビルマでの足場が揺らぎ始めた。友田によると、賠償額が少なかったために、チョーニェインがビルマ社会党中央執行委員会で「吊し上げ」られたという⁹⁶⁾。レッヤーも側杖を受けて、1956 年 3 月にビルマ共産党との和解交渉の担当者に左遷された⁹⁷⁾。友田によると、バスエ（1956 年 6 月～1957 年 2 月に暫定的に首相）はレッヤーに次ぐ有力政商のボウ・セツチャー（30 人志士のアウンタンのこと）と提携するようになり、レッヤーは 1956 年後半には「ノー・パワ」と言われるようになったという⁹⁸⁾。

高橋によると、この時にネーウィンも、高橋（と杉井）が商社に利用されるのを嫌がり介入してきたという⁹⁹⁾。その結果、高橋は 1955 年早々に日立オーバーシーズを離れ、ビルマ国防省に陸軍史の編纂協力者として雇われることになった。ビルマ大使館がまとめた「ビルマ政治外交関係月報」1955 年 1 月分にも、ビルマ国防省が陸軍史の編纂を始め、資料蒐集に日本人顧問が当たるという記事がある¹⁰⁰⁾。これが高橋のことである。杉井の方も、1955 年 3 月に日立オーバーシーズの営業活動が終了し、12 月には解散したので勤務先を失った¹⁰¹⁾。社史は解散の事情を、情勢の変化によると書くのみだが、オーバーシーズは同年 1 月にプラント輸出を初めて成功させたところであり、その他の事業も好調だった。確かに 1954 年 2 月には、造船疑獄に巻き込まれて杉井以外の 2 人の取締役が逮捕されたが¹⁰²⁾、不起訴になり会社・業界からは離れていなかった。そうであればやはり、レッヤーの力の減退やネーウィンの介入が、解散の決定的な要因だったことになる。

杉井はその後もしばらくビルマにとどまり、レッヤーと日本企業の橋渡しをした。1955 年 4 月末にビルマに着いた三信建設工場取締役の古賀昇は、杉井の世話を受けたことを記している¹⁰³⁾。しかし、杉井は 1956 年には一旦日本に戻ったと見られる。杉井は同年 12 月 8 日の『週刊読売』臨時増刊に寄稿しており¹⁰⁴⁾、秋までには帰国したはずである。杉井は、未開拓であるシャン州の開発にも未練を残しており¹⁰⁵⁾、志半ばでの帰国だったことになる。

レッヤーのこの後についてはあまり史料がなく、今のところ詳細はわからない。それでも、1963 年にネーウィン政権によって逮捕されたことが知られる¹⁰⁶⁾。彼とネーウィンは一貫して不仲であり、ついに実力行使を受けたのである。その後、釈放されたレッヤーは、1969 年にタイとの国境地帯に逃れ、又と連絡をとってネーウィンとの戦闘を続けることになった。

(2) 1958 年・ビルマ国軍の第 1 次クーデター

ビルマ国軍に雇用された高橋は、国軍史—それも BIA 時代に関わる資料の収集を実直にこなした。今日、南機関に関する最も詳しい一次史料として知られる「南機関外史」は、1944 年に杉井と高橋が編集したものだが、一旦は散逸していた。それが、1955～1956 年の日本での探索により「発見」されたのだった。日本占領期にビルマ国軍最高顧問として杉井と高橋に編集事業を行わせた沢本理吉郎（元少将）は、「発見」された「南機関外史」に、1956 年 1 月 7 日付けで序文を書いている。「発見」は、高橋による探索の成果だったことになる。高橋の回想記にも、編集事業に関わる記述がある。後には、ビルマ国軍士官学校史の編集を、元顧問・大尉

の秦源宏に取り次いだことが知られる¹⁰⁷⁾。

その後 1958 年に、チョーニェインはバスエと組み、閣僚人事をめぐって又首相に譲歩を迫った。緊迫した事態を收拾するために、ネーウィンが率いるビルマ国軍は、同年 9 月にクーデターを行い、暫定的に政権を担当した（10 月に正式化）。この時にネーウィンは、物価の引き下げを目玉政策の一つにした。高橋は、川魚の価格の引き下げ方策の立案を任されたと述べている¹⁰⁸⁾。また、アウンジー参謀次長の、カーボウ谷地の開拓に 280 人の日本人農業技術者・移民を招く案を、日本に取り次いだことも知られる¹⁰⁹⁾。この他に、日本大使館に、ネーウィンの考え（反共政策をとりさえすれば、又とバスエ、チョーニェインのどちらに政権を戻しても良いというもの）を告げることもあった¹¹⁰⁾。

このようにネーウィンは高橋を身近で使ったが、日本を優遇したわけではなかった。ネーウィン暫定政権は、1959 年 12 月に、米の買い取り量が少ないとして、日本からの輸入を全面的に停止した。これは、日本が買い取り量を増やした翌 1960 年 2 月まで続いた¹¹¹⁾。それに、竹パルプ工場の合弁事業も決定を見送り、合弁対象国も日本に限定しない立場をとった¹¹²⁾。カーボウへの農業移民についても、ビルマ人と「同一条件の下に働いて貰い」というものなので¹¹³⁾、日本人にとってメリットは少なかった。そうであれば、高橋には日本ロビーとして力を発揮したわけではなく、基本的には「客」「話し相手」に過ぎなかったことになる。

その後ネーウィンは、1960 年 2 月にウー・ヌに政権を戻すことを宣言した。ヌは、首相への再就任を前に 3 月末に日本にやってきた。その際、奥田に伴われて靖国神社に参拝したことが知られる¹¹⁴⁾。奥田は以後もパイプ役としてビルマに関わった。ネーウィンの方は、1962 年に 2 回目のクーデターに踏み切り、その後は現在に至るまで国軍支配の時代が続いている。高橋は 1963 年に一旦帰国し¹¹⁵⁾、その後も長くビルマに関わった。1960～1970 年代の話は、必要であれば別途記したい。

6. まとめに代えて

以上見てきたように、元南機関員の杉井満と高橋八郎は、日立造船の子会社である日立オーバーシーズの社員として、30 人志士のレジャー、さらにはチョーニェインと結びつきビルマへの輸出事業を取り仕切った。同社は 1953 年には、日本のビルマへの全輸出額の 1 割を担う程に急成長した。元南機関員の奥田重元も、レジャーに請われて、1954 年に賠償交渉の世話をし、1955 年からは賠償使節団事務所に勤務することになった。この他、元機関長の鈴木敬司もビルマに関わろうとしたが、レジャーやネーウィンは、鈴木に実利を与えるようなことはしなかった。

この後 1955～1956 年に、レジャーは力を失い、ネーウィンは杉井と高橋に企業活動を断念させた。レジャーと切り離された高橋は、国軍に雇われた。高橋は以後もビルマに滞在したが、その地位はネーウィンの「客」「友人」に過ぎず、日本ロビーとして力を発揮したわけではなかった。

結局、元南機関員であることは、再開された日緬の窓口になる可能性を高めたが、その地位を維持できるかどうかは、各人の資質とビルマ側の都合次第だった。ビルマ側は、旧軍気質を改めない鈴木とは関係を深めなかった。杉井とは、特にレジャーが提携したが、ネーウィンは深く付き合わなかった。ネーウィンはむしろ高橋と、長く「友人」としてつきあった。また、レ

ヤーもネーウィンも、奥田のように日本政界にパイプを持つ者については厚遇した。

高橋は、1978年のアジア経済研究所のインタビューに対して、「私たち（武島注：同席した杉井を含む）としては、南機関とはまったく関係なく、一人の日本人、友人として仕事をしているつもりです」と述べたが¹¹⁶⁾、その言葉は実態に適合したものだと言ってよい。元南機関員だからといって、必ずしも深く長く付き合えるわけではなかった。「友人」だったからこそ、長く付き合えたのである。さらに杉井は、「日本人がビルマの独立を助けたなんていう人がありますが、そういう意見には恥ずくてたまらない」と述べている。この言葉も充分腑に落ちる。ビルマ側が重視したのは、実務能力と人柄を備えた杉井・高橋、さらには池田勇人や吉田茂とのパイプを持つ奥田であり、自身の「独立」への貢献を吹聴する鈴木ではなかった。

注

- 1) 阿曾村邦昭「鈴木大佐の「ビルマ独立論」」、阿曾村邦昭・奥平龍二編『ミャンマー：国家と民族』、古今書院、2016年、286～288頁。
- 2) 以上の論議は、拙稿「日本占領期ビルマにおけるタキン・トゥンオウッ、タキン・バセインの闘争：バモオ、タキン・コウドオ・フマイン派との主導権争い」、『東南アジア 歴史と文化』50号、2021年、98～99頁を参照。南機関に関するこれ以前の研究については、拙著『日本占領とビルマの民族運動：タキン勢力の政治的上昇』（龍溪書舎、2003年）の第2部第2章を参照。
- 3) 松本匡史「ビルマ独立の士を育てた「南機関」」、藤岡信勝・自由主義史観研究会『教科書が教えない歴史』、産経新聞ニュースサービス、1997年、249～251頁。近年では、小神野真弘『アジアの人々が見た太平洋戦争』（彩図社、2015年、105～106、121頁）、山崎雅弘『太平洋戦争秘史：周辺国・植民地から見た「日本の戦争」』（朝日新聞出版、2022年、250～251、422～423頁など）が、鈴木らの南機関員を一般の日本軍と分けて扱い、受章を「恩」「敬愛」という文脈で語っている。
- 4) 『ビルマ情報』282号（1981年2月20日）、1頁。同283号（1981年3月20日）、1頁など。受賞のスケジュールは、アジア経済研究所『アジア動向年俵・1981年版』（アジア経済研究所、1981年、428～431頁）、同『アジア・中東同行年報・1982年版』（アジア経済研究所、1982年、413～414頁）が詳しい。ヤンナインの受章については、根本百合子『ティンサ：ビルマ元首相バ・モオ家の光と影』（石風社、2007年、178～180頁）も触れている。
- 5) 高橋八郎・太田弘毅「高橋八郎氏戦時回想録・下」、『軍事史学』48巻3号、2012年12月、140頁。
- 6) 友田光男「緬甸の当面する諸問題」、4頁。友田が1956年3月に記した原稿。
- 7) Maung Maung, *Burma and General Ne Win*, Rangoon, Religious Affairs Dept, Press 1969. Mary Patricia Callahan, *Making Enemies: War and State Building in Burma*, Ithaca, Cornell University Press, 2003. 中西嘉宏『軍政ビルマの権力構造：ネー・ウィン体制下の国家と軍隊 1962～1988』、京都大学学術出版会、2009年。同「ビルマ：急進化が逆転した議会制民主主義」、粕谷祐子編著『アジアの脱植民地化と体制変容：民主制と独裁の歴史的起源』、白

- 水社、2022 年。Maung Aung Myoe, *Building the Tatmadaw: Myanmar Armed Forces since 1948*, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 2009.
- 8) Cady John Frank, *A History of Modern Burma*, Ithaca, Cornell University Press, 1958. Furnivall John Sydenham, *The Governance of Modern Burma (second edition)*, New York, International Secretariat Institute of Pacific Relations, 1960. Richard Butwell, *U Nu of Burma*, Stanford, Stanford University Press, 1963.
- 9) 吉沢公介『池田政権期の日本外交と冷戦：戦後日本外交の座標軸 1960～1964』、岩波書店、2009 年、147 頁。同書が、奥田が『みんなみ』に載せた多くの論稿（後述）を使っていないのも問題である。
- 10) *Making Enemies*, pp. 119-127.
- 11) 遠藤順子『ビルマ独立に命をかけた男たち』、PHP 出版、2003 年、176～179 頁など。
- 12) 「日本占領期ビルマにおけるタキン・トゥンオウツ、タキン・バセインの闘争」、その第 1・2 章。拙稿「バモオ小伝：「独立」ビルマのアディパティ（国家代表）」、高綱博文・門間卓也・関智英編『グレーゾーンと帝国：歴史修正主義を乗り越える生の営み』、勉誠出版、2023 年。
- 13) 以下、断りのない限り、2 のあらすじは「日本占領期ビルマにおけるタキン・トゥンオウツ、タキン・バセインの闘争」、「バモオ小伝」、および「南機関外史（写）」（防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵、史料番号は南西・ビルマ-43）による。鈴木に合流する前の杉井については、中国通信社『中支商工取引総覧・昭和 15 年版』（中国通信社、1940 年、67 頁）や、南洋経済研究所『南洋関係会社要覧・昭和 14 年版』（南洋経済研究所、1939 年、5 頁）が詳しい。ジャワで綿布や雑貨の輸入業を営み、その後上海に移り、同地で興亜院に入り鈴木と出会ったのだった。
- 14) 杉井満「ビルマ独立運動と南機関：風雲児オンサンの思い出」、『週刊読売』臨時増刊号、1956 年 12 月 8 日、112 頁。中野校友会『陸軍中野学校』、原書房、1978 年、354 頁。この他、山本政義『ビルマ工作と謀略将校：中野一期生の回想』（六興出版、1978 年、201 頁）も、1963 年の旧南機関関係者の親睦会に、岡田が来ていたことを記している。
- 15) 30 人志士になる前の名はコウ・フラペー。1936 年・1938 年・1939 年の話は、ドバマーアスィーアヨン・タマイン・ピューズーイェアプエ『ドバマーアスィーアヨン・タマイン（ドバマ組織の歴史）』（Rangoon、サーペー・ベイツマン、1976 年）の 547、296、472 頁を参照。ウー・チョーニェイン（政治家のチョーニェインとは別人）『イェボー・トゥンジェイツ（30 人志士）』（Rangoon、インワ・サーペータイツ、1998 年、149～151 頁）も、レッヤーの履歴を記している。
- 16) 『ドバマーアスィーアヨン・タマイン』、533～534 頁。
- 17) 『陸軍中野学校』、358 頁。
- 18) 「南機関外史（写）」、44 頁。『ドバマーアスィーアヨン・タマイン』、551 頁。
- 19) 野田毅『野田日記』、展転社、2007 年、1942 年 1 月 5 日条（132 頁）。奥田重元「開戦前夜の盤谷」、『みんなみ』2 号、1978 年後半、11 頁。同「南への郷愁・3」、『みんなみ』8 号、1983 年 1 月、31、34 頁。同「南への郷愁・4」、『みんなみ』10 号、1984 年 1 月、44 頁、などを参照。
- 20) 『野田日記』、1942 年 1 月 19 日条（140 頁）、2 月 19 日条（155～156 頁）などを参照。

- 21) 「南への郷愁・4」、47、52 頁。
- 22) 『陸軍中野学校』、379、381 頁。
- 23) 高橋八郎「親日ビルマから抗日ビルマへ」、『鹿児島大学史録』10 号、1977 年 11 月。バモオ批判は 108 ～ 111、経済的困窮や日本軍の不当な振る舞いについては、111 ～ 124 頁など。
- 24) 以上、泉谷達郎『その名は南機関』（2 版）、徳間書店、1969 年、218 ～ 219 頁。同『ビルマに咲いた友情と信頼の花：インパール作戦・イラワジ会戦外史』、日本・ミャンマー歴史文化交流協会、1996 年、第 1・2・4 章。『野田日記』、1943 年 8 月 9 日条（368 頁）。『陸軍中野学校史』、453、461 ～ 462 頁。「南への郷愁・3」、34 頁など。杉井満「シャン州追想録」、鈴木貢編『シャン州回顧録』、ビルマ・シャン州会、1978 年、119 ～ 120 頁。『野田日記』、1943 年 7 月 24 日条（363 頁）。「南機関外史（写）」、冒頭の「序に代へて」を参照。
- 25) 「河辺正三日誌（昭和 18.12.3 ～ 19.4.10）」（防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵、作戦指導・日記・268）の 1944 年 2 月 4 日、22 日、23 日、3 月 4 日条を参照。
- 26) 「（仮タイトル）ウー・バスエ関係資料・1」の、バスエが記した回想記（原稿）の 18 頁など。
- 27) 森山康平・栗崎ゆたか『証言記録大東亜共栄圏：ビルマ・インドへの道』（新人物往来社、1976 年、173 頁）を参照。また高橋は、1978 年のインタビューで、この時のことを詳しく話している（「高橋八郎・杉井満氏」、『南・F 機関関係者談話記録』、アジア経済研究所所内資料 4、1979 年、78 頁）。
- 28) ウー・フラ『ダディンザーミャー・ピョーピャーデ・スイッピー・パマーピー（新聞が語る戦後のビルマ国）』（Mandalay、ジープワーイェー・ポンフネイッタイ、1966 年、135、239、280 頁）は、この件についてのレッシャー関連の史料を載せている。
- 29) *Making Enemies*, p. 124., *Building the Tatmadaw*, pp. 49-50.
- 30) 担当ポストの変遷については、アジア協会編『東南アジア政治経済総覧・上巻』（ダイヤモンド社、1957 年、427 頁）が詳しい。
- 31) 外交関係の樹立に関わる経緯は、外務省アジア局第 4 課が 1955 年にまとめた「国交調整に関する日緬交渉記録」を参照。アジア歴史資料センター蔵、レファレンスコード Ref. B20010003300 に収録。以下、Ref. を付けたものは同センターの資料。
- 32) 日立造船株式会社『日立造船株式会社 七十五年史』、日立造船株式会社、1956 年、71、478 頁。出張のスケジュールは付表の 13、17 頁を参照。
- 33) 『ビルマ独立に命をかけた男たち』、177 頁。
- 34) 高橋八郎「夜明け前のビルマと私」、『ビルマ情報』335 号、1985 年、4 頁。
- 35) 1952 年 10 月に外務省アジア局第 4 課が作成した「懸案および要望事項（ビルマ連邦）」（Ref. B20010003300 に収録）に記載されている。
- 36) ビルマ大使が 1959 年 11 月のネーウィンとの会談内容を記した「ネウイン首相との会談に関する件」による（Ref. B20010003300 に収録）。
- 37) 「ネウイン首相との会談に関する件」。
- 38) 奥田重元「ネウイン総理と語る 奥田重元の手記」、『国会』16 巻 6 号、1963 年 6 月、15、19 頁。
- 39) 「ビルマ独立運動と南機関」、117 頁。杉井は、「戦時中の失政」を踏まえ、今日こそ共存共栄を目指したいという抱負を述べている。

- 40) 『船の科学』4巻12号、1951年12月、62頁。
- 41) 『日立造船株式会社 七十五年史』、478、479頁。国際協会編『国勢総覧』101版、国際連合通信社、1954年、862頁。
- 42) 領事館の設置については、「国交調整に関する日緬交渉記録」の他、Ref. B21010394500 が収める1952年8月22日の在外事務所長の電報などを参照。
- 43) 坪谷正吉「建国秘話」、『秘録大東亜戦史・3・ビルマ篇』、富士書苑、1953年、314頁。
- 44) 『日立造船株式会社 七十五年史』、479頁。
- 45) 『日立評論』34巻6号、1952年6月、824頁。
- 46) 『日立評論』36巻4号、1954年4月、110～111頁。
- 47) 国勢協会編『国勢総覧』101版、国勢世界通信社、1954年、862頁。
- 48) Ref. B23010208600 が収める、外務省経済局アジア課「ビルマの経済貿易概観・1959年」、その147頁による。同冊子は1960年10月のもの。
- 49) 高橋の戦後の履歴は、高橋八郎「最近のビルマを觀て」（小菅信一編『やすらぎ』、たづな会事務局、1969年、263頁）、同「ビルマ独立の前線」（歩十二編集委員会編『歩兵第十二連隊 百十年祭記念誌』、歩十二会事務局、1985年、403頁）、「夜明け前のビルマと私」、4頁などを参照。
- 50) 戦前の高橋については、「最近のビルマを觀て」、261頁や、「ビルマ独立の前線」、402頁が詳しい。高松高等商業学校『高松高等商業学校一覧・昭和12年度』（高松高等商業学校、1937年、179頁）からも、高松高等商業を出て大阪税関に就職したことが確認できる。
- 51) 「最近のビルマを觀て」、261頁。
- 52) 大洋漁業株式会社「水産食品の増産を図れ」、『先見経済』271号、1952年4月、7頁。同社は、「アジア各国は日本の漁船と漁業技術を要望している」とした。
- 53) 「緬甸軍政史」、249頁。防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵、史料番号は南西・ビルマ-68～71。
- 54) 「桜井徳太郎日誌（1944.11～1945.3）」（防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵、南西・ビルマ-171）、1945年2月26日条。
- 55) The Economic Situation in Burma, February 1953, *Burma*, 1 (1), Rangoon, 1953.4, p. 29.
- 56) 外務省アジア局第4課が1952年9月にまとめた「ビルマ事情に関する件」による（Ref. B20010003300 に収録）。
- 57) 稲垣平太郎「最近のビルマ」、『先見経済』844号、1953年10月、8頁。この件についてのレッシャーと産業省（大臣はチャーニェイン）の動きについては、小暮秀晃『国際投資形態による合弁会社経営実例集・下』（国際投資研究所、1963年、1～5頁）が詳しい。レッシャーは1953年末に来日して大洋漁業との詰めの交渉をしたという。
- 58) 『ダイヤモンド』43巻4号、1955年1月21日、25頁。
- 59) 沼野晋太郎「明るい造船界：日立造船松原社長に聴く」、『インベストメント』5巻4号、1952年3月、45頁。『製紙工業』1巻1号、1954年1月、28頁。『ダイヤモンド』43巻4号、1955年1月21日、2頁。
- 60) 大野一月「ビルマの竹パルプ工業」、『資源』11・12合併号、1953年3月、65頁。吉田赳

- ほか「ビルマ国竹パルプ製紙工場建設現地調査概要」、『鹿島建設技術研究所会報』5号、1955年6月、48、51頁。『日立造船株式会社 七十五年史』、479頁。
- 61) 『日本経済情報』17巻10号、1958年10月、61頁。『Hitz 技報』72巻1号、2011年7月、7頁は、同工場の写真を掲載している。
- 62) 『ビルマ独立に命をかけた男たち』、178頁。
- 63) 『Hitz 技報』72巻1号、2011年7月、7頁。
- 64) 『ダイヤモンド』43巻4号、1955年1月21日、25頁。松原与三松「仏教国ビルマを訪ねて」、『大世界』9巻12号、1954年12月、65～69頁。松原には、2年前に訪日したテッティンが随行した。
- 65) 「緬甸の当面する諸問題」、4頁。『ダイヤモンド』43巻4号、1955年1月21日、25頁。
- 66) 「緬甸の当面する諸問題」、2、4頁。
- 67) 『国際投資形態による合弁会社経営実例集・下』、2～3頁。
- 68) 「(仮タイトル) ウー・バスエ関係文書綴・1」の、バスエが記したと見られる回想記(原稿)の15、18、31、103、104頁など。
- 69) 『ドバマーアスィアヨン・タマイン』、533～534頁。
- 70) 鈴木敬司「日本とビルマ」、『師友』44号、1953年6月、13頁。
- 71) 『真相』特集版16、1950年2月、49頁。人事興信所編『人事興信録・17版・下』、人事興信社、1953年、「な49」の中村清の記事による。
- 72) 勝間田清一著作集刊行委員会『勝間田清一著作集・3(回想の七十余年)』、日本社会党中央本部機関紙局、1987年、319～320頁。
- 73) 輸入の詳細は、1953年2月18日の衆議院農林委員会での東畑四郎食糧庁長官の説明(国立国会図書館・国会議事検索システムによる)や、『朝日新聞・東京版』1953年2月19日・夕刊を参照。
- 74) 『朝日新聞』1953年2月16日・夕刊での広川弘禅農林相の説明。
- 75) 鈴木の実動は、『朝日新聞・東京版』1953年2月19日・夕刊と、Ref. B20010003300が収める「懸案および要望事項(ビルマ連邦)」による。
- 76) 「建国秘話」、314頁。
- 77) 国会議事検索システムによる。
- 78) 片岡勇蔵「ビルマの恩人・鈴木敬司将軍」、『師と友』20巻3号、1968年3月、29頁。
- 79) 「日本とビルマ」、13頁。
- 80) 『日化協月報』6巻6号、1953年6月、36頁。
- 81) 国会議事検索システムによる。
- 82) 「最近のビルマ」、7頁と、堀江薫雄「ビルマに就いて」(『くろしお』2巻3号、1953年11月、38頁)によると、買い取り量の増加・長期契約などを求められただけだったという。
- 83) 日本ビルマ協会と日本緬甸協会が別組織だったことは、アジア協会編『東南アジア政治経済総覧・上』(ダイヤモンド社、1957年、426～427頁)によって確認できる。
- 84) 以下、オートレース事業については浜松市編『浜松市史・4』(浜松市、2012年、400頁)、日本小型自動車振興会『オートレース30年史』(日本小型自動車振興会、1981年、95～104、502～505頁)、『東海展望』1956年8月号、39頁を、民営化の要求については『静岡

新聞・遠州版』1950年12月11日などを参照。八百長の件は、『週刊サンケイ』6巻20号(1957年5月19日、27頁)を参照。これらの史料の閲覧について、浜松市立中央図書館の日高純江さんに大変お世話になった。

- 85) 『野田経済』6巻7号、1955年7月、72頁。同誌は、この件の指揮をとっている人物を、「ビルマ派遣軍の将官」「ビルマ浪人族の親分株」と書いている。また、『真相』66号(1954年7月、19頁)は、日平社長の宮島鎮治の配下に「旧参謀本部の南方班系の分子」がいるとしている。ビルマ国軍を動かせるという宣伝文句からして、中心人物は鈴木だったはずである。
- 86) 『静岡新聞・遠州版』1956年1月8日・夕刊による。
- 87) 『ビルマ情報』114号、1967年2月、5頁。同115号、1967年3月、3頁。「ネウイン総理と語る 奥田重元の手記」、19頁。
- 88) 奥田重元「戦後日緬国交夜話・2」、『みんなみ』13号、1985年8月、以下特記のない限り、奥田の話はその47～60頁による。
- 89) 「京都事務局月報」7号、荒敬編・解題『日本占領・外交関係資料集：終戦連絡地方事務局・連絡調整事務局資料・2期7巻(京都)』、柏書房、1994年、27頁。
- 90) 『毎日新聞』1953年3月21日も、この時のミンガウンの来日を報じている。
- 91) 「緬甸の当面する諸問題」、4頁。
- 92) 週刊読売編集部「“高杉晋作”を名乗る革命軍司令官」(『週刊読売』21巻11号、1962年3月18日、94頁)による。
- 93) Ref. B20010045500 の、「ウ・ヌー閣下訪日歓迎パーティー」による。
- 94) 友田光男が1956年頃にまとめた「ビルマ関係者一覧表」による。
- 95) 週刊読売編集部「ビルマ独立愚連隊」、『週刊読売』20巻22号、1961年5月28日、99頁。『その名は南機関』、2、239頁。『ビルマに咲いた友情と信頼の花』、258頁。
- 96) 「緬甸の当面する諸問題」、5頁。
- 97) 「イエボー・トゥンジェイツ」、152頁。
- 98) 友田光男「「ビルマ」の一断面」、38頁。1956年10月にまとめた原稿。
- 99) 「夜明け前のビルマと私」、4頁。
- 100) Ref. B21010085600 に収録。ビルマ大使館が作成したもの、その9頁。
- 101) 『日立造船株式会社 七十五年史』、479頁。
- 102) 日本海事図書出版『船はこうして造られた：計画造船』、日本海事図書出版、1956年、96～97頁。『実業の世界』51巻5号、1954年1月、34頁。『法曹』11巻51号、1954年11月、65頁など。
- 103) 古賀昇「或るビルマ便り」、『道路建設』111号、1957年3月、24頁。
- 104) 「ビルマ独立運動と南機関」。
- 105) 「シャン州追想録」、120頁。
- 106) 『ビルマ情報』77号、1964年1月、1頁。逮捕は1963年12月16日。
- 107) 秦源宏『ビルマ陸軍士官学校思い出の記』、私家版、1981年、68頁。
- 108) Ref. B21010091700 が収める、1958年10月21日の大使から藤山愛一郎外相への報告による。
- 109) 『ビルマ情報』20号、1959年4月、1頁。

- 110) Ref. B21010091700 が収める、1958 年 10 月 6 日の大使から藤山愛一郎外相への電報による。
- 111) Ref. B23010208600 が収める、「ビルマの経済貿易概観・1959 年」による。
- 112) 「ビルマ経済貿易概観・1959 年」による。
- 113) 「ネウイン首相との会談に関する件」による。
- 114) 江崎道朗「世界から見た靖国神社」、『祖国と青年』28 卷 8 号、1997 年 8 月、54 頁。
- 115) 「ビルマ独立の前後」、403 頁。
- 116) 以下の談話は、「高橋八郎・杉井満氏」、20 頁による。

本研究は JSPS 科研費 JP24K04264 の助成を受けたものです。